

関連事項

① 清水南山の帝室技芸員任命と『金工研鑽録』

昭和九年十二月、彫金教授清水南山が橋本閑雪、松林桂月、和田英作、岡田三郎助、藤島武二、山崎朝雲、香取秀真、板谷波山らとともに帝室技芸員に任命された。南山は本校で加納夏雄、海野勝珉に彫金を学んで大正八年以後母校教員をつとめていた。若い頃の研鑽振りについては正木直彦が『回顧七十年』の「法隆寺と清水亀藏」に書いている。

帝室技芸員任命の翌年には、南山は帝国芸術院会員にも任命された。同じ頃、彫金部生徒に講義録『金工研鑽録』が配布された。本校では実技の教官が講義録を遺すことは少なかったため、これは珍しい例の一つと言える。序文には次のように記されている。

本書ハ清水龜藏先生御秘藏ノ金工ニ関スル記録ノ寫本ニシテ、斯道ノ所謂秘傳ヲ詳カ〔ニ〕セリ。

先生カネテヨリ原記録ノ獨有ヲ屑シトセラレズ、且、之ガ世ニ埋ルヲ憂ヘテシ遂ニ今回、我等學生ニ貸與サレ廣ク其ノ惠ヲ分タル、ト共ニ、永ク後世ニ傳ヘラレントス。我等ハ茲ニ大ナル感激ト感謝トヲ以テ寫本六十部ヲ作成セリ。然ルニ原記録ハ断片的ニ記述セラレシニヨリ、之ヲ系統的ニセント欲シタルニ、他面、原文ヲ其ノ儘記載セルタメ、文章ノ連結等甚ダ當ヲ得ズ。幾クバ讀者ノ此ノ點ヲ諒察セラレントヲ請フ。

本書ノ成ルニ當リ清水先生ニ謹ミテ謝意ヲ表スルト共ニ、學校事務室及飯田正美君ヨリ印刷器具ヲ借用シ多大ノ便宜ヲ得タルヲ以

テ深謝スル次第ナリ。昭和八年夏

本書はB5判、七十四頁。謄写版印刷である。第一編「合金法」(第一章「金工ニテ多ク使用セラル、合金」、第二章「鑲」、第二編「着色法」(第一章「彫金ノ着色法」、第二章「鑄金ノ着色法」、第三章「腐蝕法及其ノ他」)から成る。

② 西洋美術品の寄贈、石膏室

前年におけるラグーザの遺作に引き続いて昭和九年にも西洋美術品の寄贈があった。左記は『校友会会報』第三号所載「文庫彙報」に記されているその作品名等であるが、「」は『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録 陶磁』の記述を示す。

コンスタン・ムニエ筆「炭坑夫の伴」 油画一点

石田信之助寄贈

ジョン・エス・サージェント筆木炭画三枚

サージェント家財産管理人寄贈

クロード・ミッシェル作「春夏秋冬浮彫」石膏複製 四点

パリ日仏協会寄贈

セーヴル窯花瓶、壺(藍地金彩桜花文大壺、蓋付印刻文白磁大壺)

各一個 パリ日仏協会(アンドレ・オノラ)寄贈

同 兀鷹(禿鷹) エー・エル・バシユレ作 一個

同(同)寄贈

同 フローラ胸像(少女胸像) ジー・ペー・カルポー作 一個

同〔同〕寄贈
同舞踊女群像〔舞踏人形〕 アガトン・レオナルド作 十二個

同〔同〕寄贈

右のサージェントの作品については同会報に「此度フォツグ美術館東洋部長ウオーナー氏及本校矢代教授の斡旋に依り同畫伯の遺族より本校に寄贈された」と記されている。

また、ボストン美術館からは左記の石膏複製三十四個が寄贈された。

ボロブドウル浮彫	七個
アッシリア浮彫	三個
ギリシヤ浮彫	二個
エジプト浮彫	六個
合唱隊 ルカデラ・ロビア作	十個
モーゼ像 ミケランジェロ作	一個
夜と昼群像 同	一個
暁と夕群像 同	一個
セント・ジョージ像 ドナテルロ作	一個
ガツタメラータ騎馬像 同	一個
コレオニ騎馬像 ヴェロッキオ作	一個

以上の石膏像の正式な寄贈時は昭和十年三月だが、既に同九年十月発行の『校友会会報』第二号に石沢正男が「一日も早く之を公開

して展観に供し度いと思ひ乍らも、差當り荷解きして輸送中に蒙つた破損を修理する場所もなく、空しく倉庫に收めて焦慮するのみであつたが、最近本館内庭の一部を改造して其陳列に充てることとなり、既に工事に着手したから遠からず其俾客に接しうるであらう。」と記しているので、九年の秋以前に到着していたことが判る。運搬中に大分破損したが、本校ではそれを修理し、本館中庭を石膏室に改造して陳列、以来ここは石膏デッサン研鑽の場となつた。この石膏室が初めて一般に公開されたときの模様を新聞は次のように伝えている。

上野美校へ來た 文藝復興期の名作品 石膏にとりボストンから 二十四日から公開

ルネサンス
文藝復興期のイタリー彫刻の名作と古作アッシリア、エジプト、ギリシヤの彫刻等は石膏複製すら我國には殆ど無く殊に高さ一丈余〔餘〕に及ぶ大彫刻に至つては我國で鑑賞することは全く絶望視されてゐたが、多年我國及び東洋美術と關係深いアメリカのボストン美術館から上野の東京美術學校へこの程寄贈、最近美校内に陳列場が落成したので漸く組立てを終り來る三月二十四日から同校卒業制作展覽會を機に初めて公開されることとなつた、日本最初の彫刻名作陳列所が出来たわけである

此名作高さ一丈に及ぶ大騎馬像二ツ——ドナテルロ作ガツタメラタ騎馬像とヴェロッキオ作コレオニ騎馬像とミケランジェロ作のイタリーフロレンス市にあるメヂチ家廟の三體群像『暁と夕』『晝と夜』及びモーゼ像、ダビデ像、ルカデラロツビア作合唱隊

浮彫等文藝復興期代表作と古代作品である、石膏とは云へ原物と寸分違はず只ブロンズ乃至大理石でないだけだから従来名作に接して研究する機会を全く持たなかつた學生は勿論一般美術愛好家の喜びは非常なものである、外國の有名な美術館には何處でも原物の無い場合は石膏の原物大像を蒐集してゐるが、我國では今度の美校陳列場が嚆矢であり、今後この種の蒐集充實を希望されてゐる。美校當局では語る

外國に比べるとひどく恥かしい貧弱なものです。我が國では唯一最初です、ポストン美術館で石膏室の一部を取拂ふこととなり丁度滞米中の矢代幸雄氏、ポストン美術館アジア部長富田幸次郎氏等の斡旋と國際汽船が送料を負擔して呉れたのでやつと手に入つたわけです、深甚の感謝を我が美術界とてもせねばなりません
〔下略〕
〔昭和十一年三月六日『東京朝日新聞』〕

ただし、右記事の「石膏にとり」という見出しは誤りで、もともとポストン美術館にあった石膏像を寄贈されたのである。寄贈の理由について昭和十年二月二十六日付『都新聞』は、「ポストンでは目下東洋美術研究熱が非常に盛んで、これが爲め美術學校の矢代教授が態々渡米して東洋美術論を講演したことがあるので、その返禮であるらしい」と報じている。

③ 『東京美術學校校友会月報』の終刊と『校友会會報』の創刊
明治三十五年六月創刊の歴史を持つ『東京美術學校校友会月報』は昭和八年三月発行の第三十一卷第七号を以て終刊となり、翌九年

七月、『校友会會報』が創刊された。月報における鎌倉芳太郎に代わって香取秀真が編輯兼發行人となっている。香取は昭和八年十一月に講師から教授（東洋工芸史、金工史担当）となった。文筆、編集に長けた人であったことは言うまでもない。本誌は月報がB5判で年約八冊発行されたのに対して菊判のコンパクトサイズとなり、年三回発行された。内容構成は大體月報に倣っているが、第一号から第四号までは和田校長の方針によってか学内の出来事に関する記事のみが収録されており、月報に華やきを添えていた「芸苑彙報」、「海外消息」欄は削除されている。しかし、第五号から「芸苑彙報」欄のみは復活した。なお、第一号は活字体の題字を用い、口絵



『校友会會報』表紙